

論文

# 非行少年の教師観と学校生活に関する実証的考察

作 田 誠一郎

〔抄 録〕

本論は、少年院に在院中の少年に対してアンケート調査を実施し、これまでの友人関係や教師との関わりを中心にして学校生活における非行少年の対人意識や関係性を明らかにすることを目的とする。結果として、非行少年の多くが高等学校を中退しており、学業に対する意欲が低く、学業自体を放棄する傾向が認められた。また学校生活における逸脱行動と学業への退行との関連も認められた。友人関係に注目したところ、学校で知り合った友人が約4割を占めており、女子は男子とくらべて年上の交友が多いことが明らかとなった。また友人関係においては、男子とくらべて女子に承認欲求や空気感、そして不安感などが強くあらわれる傾向が認められた。最後に教師との関係では、その関係を3つのタイプに類型化し、理想の教師像を4つに類型化したところ、学校生活に対する無関心な傾向に対しては、友人関係や教師関係、そして学業に対する退行や孤独感など、その要因が重層的に影響を与えていることが明らかとなった。

キーワード：非行少年，学校生活，教師観

## 1. 問題の所在

近年の少年非行は、半グレや特殊詐欺にかかわる「受け子」（現金を直接受け取る役）や出し子（預金口座から現金を引き出す役）など、従来の校内暴力や暴走行為とは異なった非行が広まっている感がある。しかし、少年非行について検挙数からみるとその数は減少している。『令和元年度版犯罪白書』（2019）によれば、少年による刑法犯等の検挙人員は、1983（昭和58）年の317,438人をピークに減少しており、2018（平成30）年は44,361人と戦後で最も少ない値となった。非行少年の就学・就労状況別に刑法犯等の検挙人員の構成比をみると、平成元年の総数165,053件のうち、中学生36.1%、高校生37.2%、大学生1.2%、その

他学生 3.5%，有職少年 11.1%，無職少年 10.9% であった。しかし、平成 30 年のデータをみると、総数 23,489 件のうち、中学生 19.7%，高校生 39.0%，大学生 5.8%，その他学生 3.2%，有職少年 19.6%，無職少年 12.6% であった。つまり、約 30 年間に中学生の割合は低くなり、高校生や大学生の割合は高まる傾向にある。また有職少年においてもその割合は高まっている<sup>(1)</sup>。

同様に『令和元年度版犯罪白書』によれば、校内暴力事件の事件数および検挙・補導人員の推移は、事件数が 1983（昭和 58）年の 2,125 件、検挙・補導人員が 1981（昭和 56）年の 10,468 人をピークに減少している。2018（平成 30）年は、事件数が 668 件、検挙・補導人員が 724 人であった。また検挙・補導人員中の就学状況を見ると、小学生 20.7%（150 人）、中学生 64.1%（464 人）、高校生 15.2%（110 人）であり、中学生が最も高い割合を占めていた。

近年の少年非行に関する研究をみると、知念（2018）は、高校から中退または卒業した後の「ヤンチャな」生徒に対するエスノグラフィーを通じて、彼らの厳しい家庭環境や労働市場へ移行する際の諸問題を浮き彫りにしている。特に本論の問題関心と共通する学校生活における分析では、学校文化や教師の関係から家庭の文化と学校文化が葛藤状態であることを明らかにし、その葛藤が「現場の教授学」によって抑制されていると指摘する。この教師たちの裁量でフォーマルな学校制度とインフォーマルな生徒文化（家庭の文化を含む）の衝突を調和させる「現場の教授学」が、生徒の登校継続に積極的な影響を与え、生徒が学校から離れた場合には登校継続に逆効果を与えているという。本書を通じて学校生活における教師の言動や価値観が非行少年に与える影響の大きさを知ることができる。また松嶋（2019）は、学校における「問題の少年」を分析するなかで、非行少年の立ち直りに保護者や教師、スクールカウンセラーや警察の少年補導職員の連携をあげている。この各職種の連携が円滑であればレジリエンスの創出や支援につながり、うまく噛み合っていない状況であれば、レジリエンスが育たず問題を深刻化させてしまうという。これらの学校を中心とした少年非行の先行研究を確認すると、教師の関わりや他機関の連携が少年非行にとって大きな影響を与えていることが窺い知れる<sup>(2)</sup>。

他方で一般的な非行少年のイメージはどうであろうか。内閣府の「少年非行に関する世論調査」（2015）によれば、非行を起こす少年の経緯として「保護者が教育やしつけに無関心な家庭の少年」（51.5%）が最も高い値を示し、「スマートフォンやインターネットなどに依存している少年」（45.3%）、次に「家庭にも学校にも居場所がなく孤立している少年」（44.4%）となっている。本論においては、非行少年の学校生活が分析対象であるが、「教育」や「しつけ」、そして「孤立」が注目されるキーワードといえよう。また同調査において「児童・生徒を非行に走らせないために、学校ではどのような対応をするのがよいのか」という設問に対する回答結果として、「児童・生徒に対して毅然とした態度で接する」（46.9%）が最も高く、続

いて「家庭との連絡を密にする」(44.5%),「児童・生徒一人一人を理解する」(43.4%)の順であった。この回答結果から、一般的に少年非行の防止に際して学校の教師は、毅然とした態度で接することが重要であり、個々の児童・生徒を理解することが大切であるとイメージされているようである。

本論においては、非行少年の教師関係を読み取るとともにクラスメイトなどの友人関係に着目することで、学校生活における非行少年の意識や関係性を中心に分析する。

## 2. 分析対象と研究視角

調査は、2018年3月から同年4月にかけて少年院20か所の在院少年に対して調査票を配布して記入してもらう集合調査法を用いた。全体のサンプル数は760である<sup>(3)</sup>。また男女比は、男子が88.8%(675)であり、女子が11.2%(85)である。年齢構成は、14歳(2.3%), 15歳(5.7%), 16歳(13.5%), 17歳(20.3%), 18歳(19.2%), 19歳(22.0%), 20歳(16.3%), 21歳(0.8%)である。

本論の目的は、非行少年の学校生活における友人関係および教師との関係を中心にどのような教師観や学校観を意識しているのかを明らかにする。先述したように非行少年は、家庭の文化と学校文化の葛藤や孤立などが、結果として教師に対する反抗的な態度としてあらわれ、学校生活からドロップアウトしてしまうことが指摘される。また友人関係をみると、非行集団(非行文化またはヤンキー文化)という括りで形成され、お互いが親和的な意識を維持しているという仮説も成り立つ。以上の問題関心から、学校生活の非行少年の対人関係とその意識の実態を明らかにしていくことで今後の少年非行に対する学校や教師の関わりを検討する。

## 3. 分析結果

### 1) 学校生活における非行少年とその生活

はじめに入院前の少年たちの属性についてみてみたい(表1)。入院前の社会的地位をみると、中学生(10.6%), 高校生(9.3%), 定時制高校生(3.2%), 通信制高校生(5.3%), 専門学校生(0.7%), 大学生(0.9%), 正規の仕事(35.2%), アルバイト(16.1%), 何もしていない(10.8%), その他(7.8%)である。同表に示していないが、少年院の入院回数は、1回目(74.9%), 2回目(20.8%), 3回目(4.3%)である。この入院前の社会的地位からわかるように、生徒・学生は30.0%(222)であり、全体の3割が通学していた少年である。また生徒・学生以外で正規の仕事やアルバイト、何もしていない少年等をみると、16歳が45.5%(45)であり、17歳が66.5%(100), 18歳が74.3%(104)であった。14歳は義務教育であるためすべて中学校に所属している。しかし、15歳では少数であるが正規の仕事(2.3%)や

アルバイト（2.3％）に就いている。さらに16歳になると、過半数（54.5％）は中高生や専門学校生であるが、正規の仕事（22.2％）やアルバイト（15.2％）が増えていることがわかる。その後、17歳から18歳へと年齢が増すごとに学校から離れていく傾向が読みとれる。つまり、高校への進学率が98.8％（『令和元年度学校基本調査』）であることから、多くの少年が高校で中退しているまたは進学していないことがわかる。コントロール理論を提唱したT・ハーシ（1969＝1995）は、「投資」として退学に対するリスクが非行の抑止に関連することを指摘している。つまり、学校生活に身を置くことが非行の抑止として機能しているかもしれない。

表1 年齢と入院前の社会的地位

	中学生	高校生	定時制高校生	通信制高校生	専門学校生	大学生
14歳	100.0 (17)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
15歳	93.1 (40)	2.3 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
16歳	18.2 (18)	24.2 (24)	4.0 (4)	7.1 (7)	1.0 (1)	0.0 (0)
17歳	0.7 (1)	14.7 (22)	8.7 (13)	8.7 (13)	0.7 (1)	0.0 (0)
18歳	0.7 (1)	11.4 (16)	2.9 (4)	9.3 (13)	1.4 (2)	0.0 (0)
19歳	0.6 (1)	3.7 (6)	0.6 (1)	2.5 (4)	0.6 (1)	1.9 (3)
20歳	0.0 (0)	0.0 (0)	1.6 (2)	1.6 (2)	0.0 (0)	3.3 (4)
21歳	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
合計	10.6 (78)	9.3 (69)	3.2 (24)	5.3 (39)	0.7 (5)	0.9 (7)
	正規の仕事	アルバイト	何もしていない (無職・ニート)	その他	合計	
14歳	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	100.0 (17)	
15歳	2.3 (1)	2.3 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	100.0 (43)	
16歳	22.2 (22)	15.2 (15)	5.1 (5)	3.0 (3)	100.0 (99)	
17歳	30.6 (46)	16.6 (25)	11.3 (17)	8.0 (12)	100.0 (150)	
18歳	38.6 (54)	19.3 (27)	10.0 (14)	6.4 (9)	100.0 (140)	
19歳	44.4 (72)	19.2 (31)	14.2 (23)	12.3 (20)	100.0 (162)	
20歳	51.6 (63)	157.0 (19)	16.4 (20)	9.8 (12)	100.0 (122)	
21歳	33.3 (2)	16.7 (1)	16.7 (1)	33.3 (2)	100.0 (6)	
合計	35.2 (260)	16.1 (119)	10.8 (80)	7.8 (58)	100.0 (739)	

(注) カッコ内は実数。

次に図1は、年齢構成を中心に就学とその他に分類したものを少年院の入院回数でクロス集計した結果である。

この図から就学している少年より就学していない少年の方が、入院回数は多いことがわかる。また「19・20・21歳」で就学していない少年は、その4割が2回以上少年院に再入院している<sup>(4)</sup>。図1の結果は、少年院に入ることによって学校を退学し、さらに学校生活を離れた生活環境のなかで再び罪を犯して入院するというひとつの連鎖として読み取ることもできる。この学校生活と非行の抑止の関連に関しては、現時点で仮説の域を超えないが今後他のデータも含

めて詳細な検討が必要になる。

次に少年たちは学校生活をどのように捉えているのかについて勉強を中心にみてみたい。学業に対する意識を知るために、「頑張って勉強してよい成績をとるよりも、ほどほどの成績で卒業できればよいと思う」という設問を用意して年齢別にみたものが図2である。

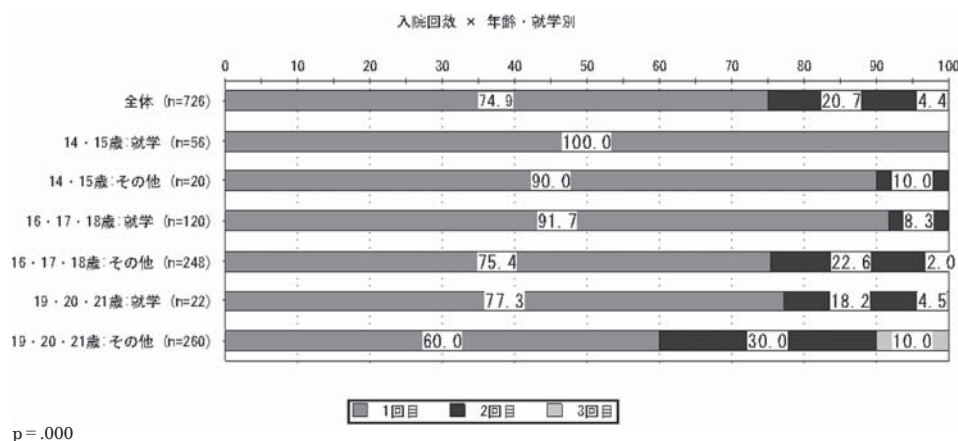


図1 年齢・就学別にみた入院回数

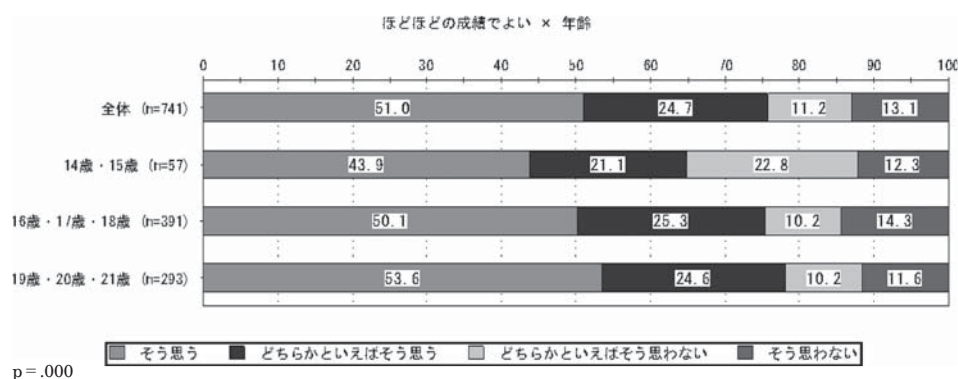


図2 年齢別にみた学業意欲

結果として、年齢を重ねるにつれて学業意欲は低下する傾向にある。全体をみても7割以上が、「思う」「そう思う」を「どちらかといえばそう思う」を統合。以後同様」と回答している。学校生活では、多くの場合その大半を座学が占めており、勉強の躓きなどが学業意欲の減退としてあらわれているかもしれない<sup>(5)</sup>。

この傾向は、図3の「学校では、勉強できないとあきらめていた」という設問の回答からも読み取れる。この結果、全体をみると「思う」という回答は73.9%であり、7割以上の少年が学校生活において勉強に対する諦めを意識していたことがわかる。また学校生活における勉強に対する諦めは、就学していない少年が就学している少年にくらべて高い値としてあらわ

れる結果となった。やはり学校生活における学業意欲は就学と関連していることが窺い知れる。

図2と同様の設問（ほとんどの成績でよい）を用いて、それぞれの学校生活における逸脱行動や意識についてその関連をみたものである（表2）。

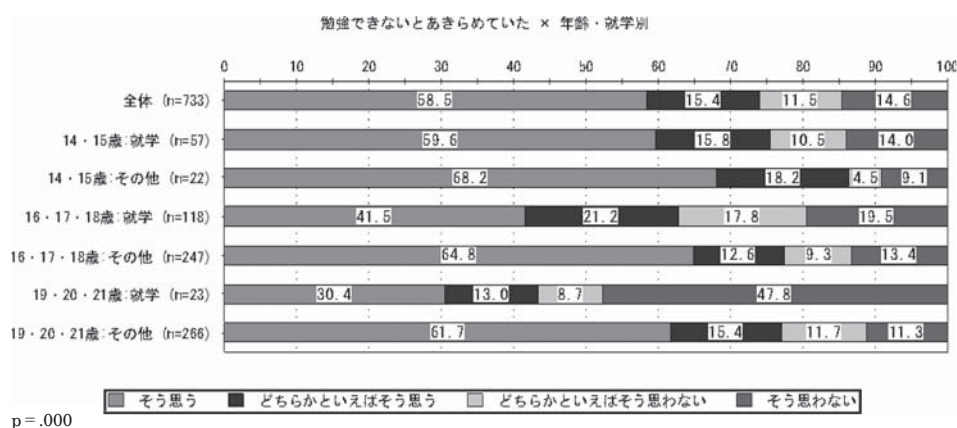


図3 年齢・就学別でみた勉強に対する諦め傾向

表2 学校生活における学業意欲との関連

	授業中の私語や騒ぎあり（「思う」）	頭髪や服装等で生徒指導を受けた（「思う」）	校則違反を友だちがやっていたらやる（「思う」）	学校以外の生活が楽しい（「思う」）
思う	88.8 (497)	86.3 (485)	77.3 (433)	86.4 (484)
思わない	77.0 (141)	68.9 (126)	64.5 (118)	77.6 (142)

（注）各設問は「思う」「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を統合）を示す。すべて p = .000

この結果をみると、学業意欲が低い（「思う」）ほど、校則違反等の逸脱行動に走る傾向が読みとれる。同様に、学校以外の生活環境に価値を見出していることがわかる。続いて、図3で示した学業への諦めに関する設問（「学校では、勉強できないとあきらめていた」）と学校生活におけるそれぞれの関連をみた結果を表3に示した。

同表から、表2と同様に学校生活における逸脱行動が学業への退行とも関連するようであ

表3 学校生活における学業の諦めとの関連

	授業中の私語や騒ぎあり（「思う」）	頭髪や服装等で生徒指導を受けた（「思う」）	校則違反を友だちがやっていたらやる（「思う」）	学校以外の生活が楽しい（「思う」）
思う	88.6 (491)	85.6 (476)	79.4 (440)	88.1 (487)
思わない	77.7 (153)	71.6 (141)	59.2 (116)	74.1 (146)

（注）各設問は「思う」「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を統合）を示す。すべて p = .000

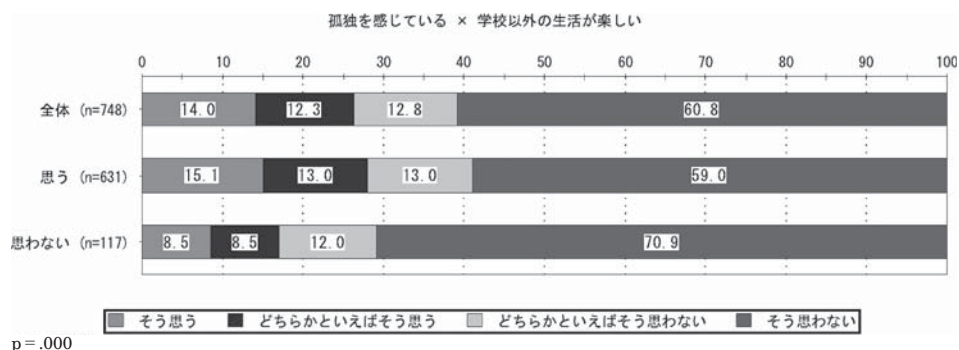


図4 学校生活以外の充実感と学校内の孤独感

る。また学校以外の生活環境に楽しみを見出している点も共通することがわかる。この学校以外の生活環境に充実感を抱いている少年は、その他にどのような学校に対する意識を有しているのだろうか。

図4は、「学校にいる時よりも、学校以外での生活の方が楽しかった」という設問の回答（「思う」と「思わない」）を基準に、学校生活における孤独感（「学校生活で孤独（ひとりぼっち）を感じていた」）の設問に対してクロス集計をした結果である。

この学校以外の場所に楽しみを見出す傾向は、同時に学校において少年自身の居場所がないことと関わっているようである。では、学校生活において非行少年はどのような人間関係を有しているのだろうか。その点について友人関係を中心に考察する。

## 2) 友人関係に注目した対人意識

児童や生徒は、教師やクラスメイト、部活動の先輩や後輩など、さまざま人間関係のなかで学校生活を過ごしている。この学校生活のなかで、非行少年はどのような友人関係を築き、対人意識を有しているのだろうか。

図5は、年齢別に少年院に入る前の友人関係（「少年院に入る前に、一番付き合っていた友だちはどんな人ですか」）をみたものである。

図5の全体の集計をみると、「以前同じ学校の人」が23.7%であり、次に「同じ学校の人」が18.4%となっている。つまり、全体の約4割が学校生活のなかで知り合った友人と一番付き合っていたことがわかる。年齢別にみると、中学生の時期にあたる14歳と15歳では、「同じ学校の人」が選択肢のなかで最も多くを占めている。その傾向は16歳でも認められるが、17歳および18歳の高校生に該当する時期においては、「以前同じ学校の人」が値として最も高いことがわかる。表1でも示したように、16歳以降から学校を退学、または進学せずにもしていない状態および正規の仕事やアルバイトに就く少年が増加している。したがって、学校生活から離れても同じ中学校や高校に在籍していた友人と交流が継続していることがわか

る。他方では、「盛り場や街で知り合った人」（14.8%）や「他校（同じ校区以外の地元）の人」（11.1%）など、学校以外において広範な友人関係を築いているようである。

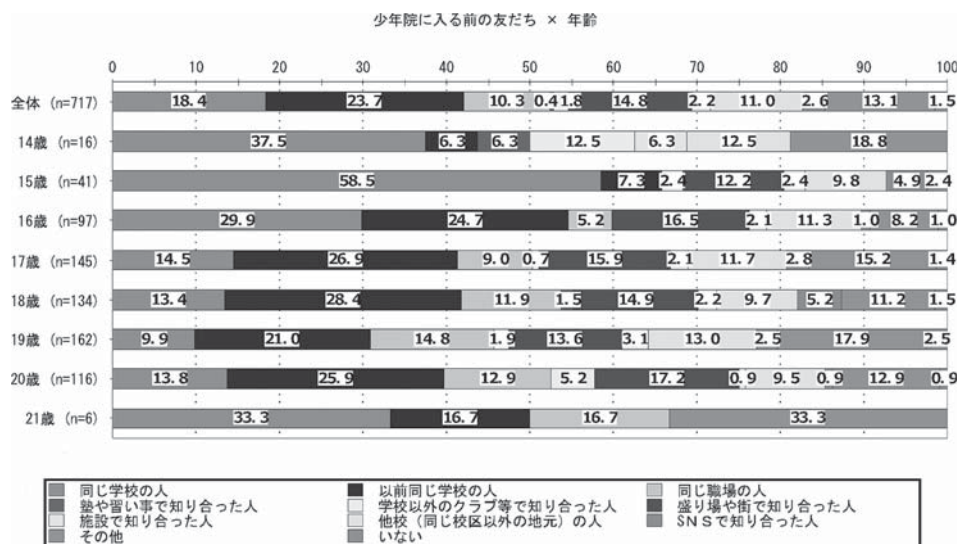


図5 年齢からみる友人関係

よく遊んでいた友人の年齢について性別で聞いたところ、図6の結果を得た。この結果を見ると、女子（54.9%）は、男子（36.6%）とくらべて「年上」の交友が最も多いことがわかる。一方、男子の59.7%は「同じ年」と回答しており、友人の年齢については性差がありそうである。

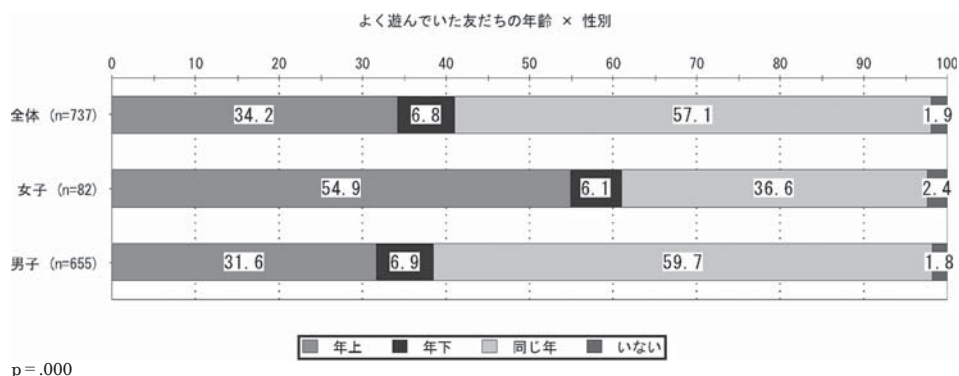


図6 性別にみた友人の年齢

友人のなかでも「親友」と呼べる関係はどうであろうか。設題の「一生付き合える親友がいる」の回答と「悩みを打ち明けられる友人の数」の回答をクロス集計した結果が図7である。この結果を見ると、「親友がいる」（思う）と答えた少年は、「親友がいない」（思わない）と



答えた少年にくらべて親友の数が多いことがわかる。またこの傾向は、交友のある異性の数でも同様の結果を得た<sup>(6)</sup>。つまり、異性を含めた親密なグループの付き合いが比較的に多いことが窺い知れる。

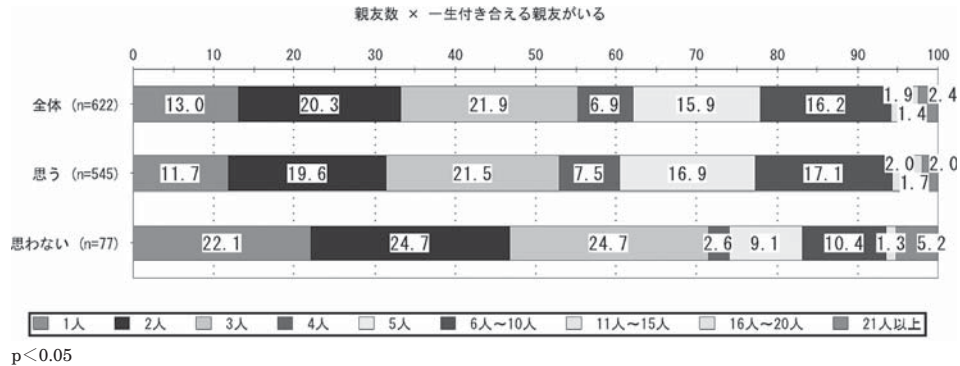


図7 親友の有無と親友の数

次に具体的な友人関係について、「一人でいるとたまらなくさみしくなる」「友だちには本音で話をしないほうだ」「自分の行動や言葉を友だちから認めてもらいたい」「友だちと遊んでいるとき、自分だけが浮いてしまうのではないかと不安になることがある」「友だちづきあいのなかで『場の空気が読める』ことは重要だ」「友だちから『上から目線』でものを言われるとむかつく」の6つの設問を性別でみた結果が表4である。

表4 性別にみる友人関係に係る対人意識

	①一人でいると寂しい	②本音の話をしない	③言動を友だちから認めてほしい	④浮いているか不安	⑤場の空気を读めることは重要	⑥友だちからの上から目線がむかつく
女子	83.1 (69)	43.4 (36)	76.8 (63)	50.6 (42)	91.6 (76)	78.3 (65)
男子	59.0 (395)	35.7 (239)	59.1 (396)	31.8 (213)	88.4 (593)	70.6 (471)
合計	61.6 (464)	36.6 (275)	61.0 (459)	33.9 (255)	88.7 (669)	71.5 (536)

(注) 各設問の「思う」(「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を統合)を示している。設問①, ③, ④はいずれも p = .000

各設問をみてみると、「一人でいると寂しい」は、男子の約6割にくらべて女子の約8割が「思う」と答えている。この傾向は、「言動を友だちから認めてほしい」と同様である。この他、性別による違いとして「浮いているか不安」の回答にもあらわれている。また「場の空気を读めることは重要」では、男女ともに約9割の少年が「思う」と答えており、「友だちからの上から目線がむかつく」の設問においても約7割が「思う」と回答している。

以上の6つの友人関係の意識に関わる設問から、友人からの共感や孤立に対する寂しさ、そして場の空気感など、非行少年の友人間の対人意識において空気感とともに不安感を有して

いるようである。

ここまで友人関係を中心に非行少年の学校生活の状況について明らかにしてきた。最後に学校生活における教師との関係やその意識についてみてみたい。

### 3) 非行少年と教師の関係にみる教師観

学校生活における非行少年と教師との関係について、「あなたにとって、中学校の先生とはどのような関係でしたか」という設問の回答結果を性別でみたものである<sup>(7)</sup>。

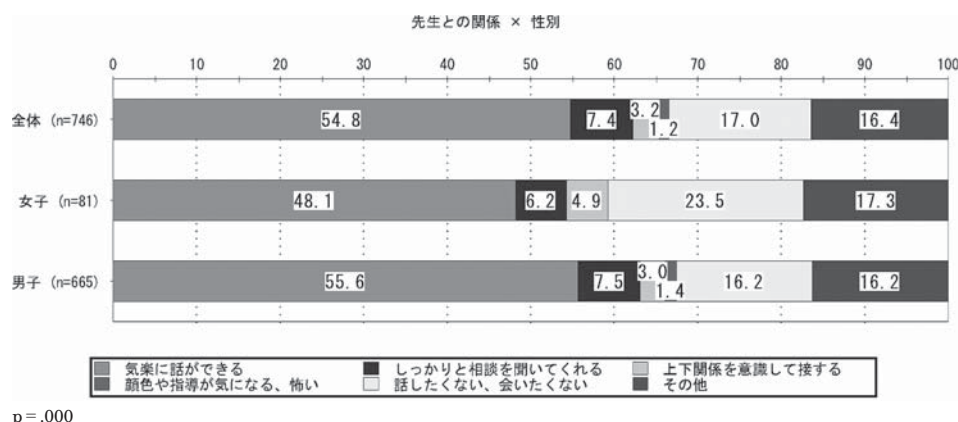


図8 先生との関係（中学校）

図8をみると、男女ともに「気楽に話ができる」という回答は半数近くを占めていたが、男子（16.2%）にくらべて女子の方（23.5%）が、「話したくない、会いたくない」という回答の割合が高いことが読みとれる。一方では、「上下関係を意識して接している」や「顔色や指導が気になる、怖い」という回答が低い割合を示していることから、管理主義的な指導関係はあまり認められないことがわかる。

この回答のなかで「その他」について自由記述を設けている。その内容を分析すると、「フラットタイプ」「信頼タイプ」「無視タイプ」「敵対タイプ」「軽視タイプ」「不信タイプ」の6つのタイプに分類できた<sup>(8)</sup>。この6つのタイプと設題の選択肢（図8）にあげた「その他」以外の5つの選択肢を含めてさらに3つのタイプに分類した。1つ目は、「先生とは気楽に話ができる」「フラットタイプ」をまとめて「親密関係」（58.7%）と名付ける。2つ目は、「しっかりと相談を聞いてくれる」「先生と上下関係を意識して接する」「信頼タイプ」をまとめて「受容関係」（12.7%）と名付ける。3つ目は、「先生の顔色や指導が気になる」「授業以外では話したくない」「無視タイプ」「敵対タイプ」「軽視タイプ」「不信タイプ」を「拒絶関係」（28.6%）と名付ける。

この3つのタイプをもとに「自分の言動を先生から認めてもらいたい」という設問をクロス集計した結果が図9となる。

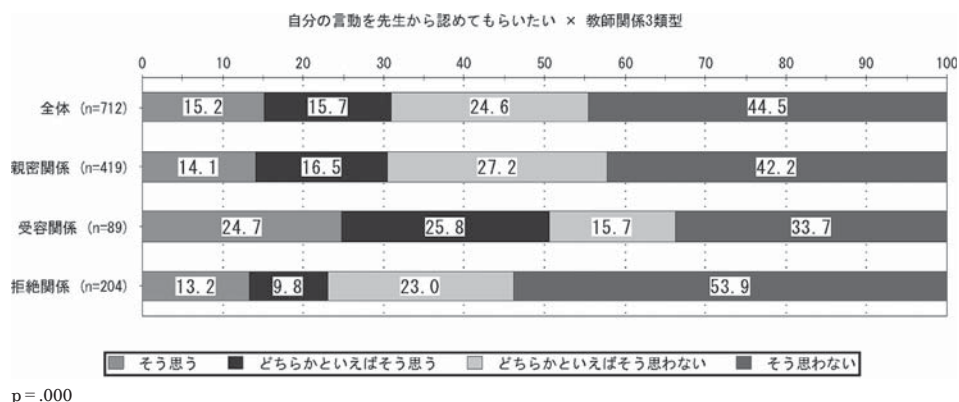


図9 教師関係3類型と教師からの承認欲求

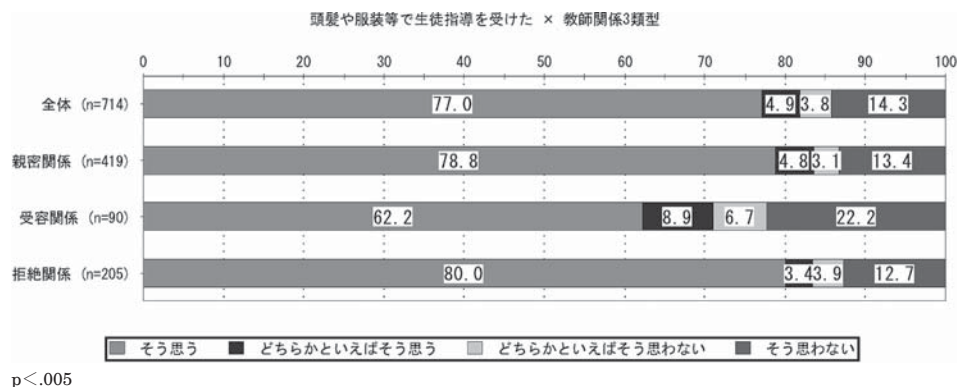


図10 教師関係3類型と生徒指導

この図から「親密関係」よりも「受容関係」を有している少年の過半数が、自身の言動について教師から認めてもらいたいと思っていることがわかる。また実際の生徒指導と教師の関係を3類型でみたところ図10の結果を得た。

図10からわかるように、「受容関係」の「思う」(71.1%)が3タイプのなかで最も低い値となった。「親密関係」は、気楽でフラットな関係性が中心に構成されている。非行少年に対して関わりを維持または構築するために「親密関係」に至れば、生徒指導の側面では「拒絶関係」と同様の結果となることが指摘される。いかにしてしっかりと話を聞き、上下関係を維持または構築しながら信頼を得ていくような「受容関係」を創出していくのが教師と非行少年の関係にとってひとつの課題であることが窺い知れる。

次に「あなたにとっての理想の先生とはどのような先生ですか」という設問の回答を性別でみた結果が図11である。

この図をみると、女子で最も割合の高いタイプは「みんなの話をしっかりと聞いてくれる先生」(34.9%)であり、男子は「おもしろい先生」(31.2%)が最も高い割合を示した。全体で

非行少年の教師観と学校生活に関する実証的考察（作田誠一郎）

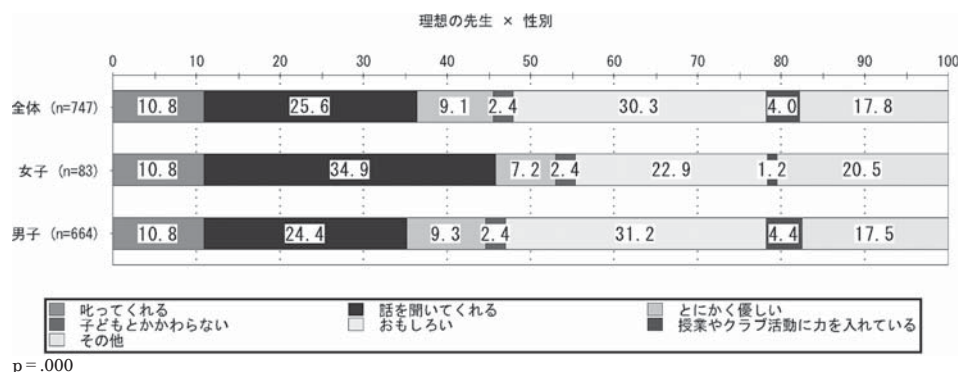


図 11 性別にみた理想の教師像

は、30.3%が「おもしろい先生」をあげており、次に25.6%で「みんなの話をしっかり聞いてくれる先生」となった。「その他」は17.8%であるが、この選択肢では自由記述を用意している。その記述内容から「理解・受容タイプ」「公平タイプ」「正対タイプ」「指導タイプ」「本気タイプ」「気さくタイプ」「メリハリタイプ」「無関心タイプ」「逸脱タイプ」に類別することができた<sup>9)</sup>。さらに選択肢を含めてそれぞれをまとめると次のとおりに分類できる。

はじめに「悪いことを叱ってくれる」「みんなの話をしっかりと聞いてくれる」「授業やクラブ活動（行事）に力を入れている」「理解・受容タイプ」「正対タイプ」「指導タイプ」は、まとめて「教示モデル」（47.3%）と名付けた。この「教示モデル」は、しっかりと少年に向き合って指導する教師像といえる。次に「おもしろい」「公平タイプ」「本気タイプ」「気さくタイプ」「メリハリタイプ」をまとめて、「魅力モデル」（37.8%）と名付けた。このモデルは、教師という職業的な接し方よりもどちらかといえば教師の個性が表出している点が特徴といえる。「あまり子どもとかかわらない」「無関心タイプ」は、「不干渉モデル」（4.0%）と名付けた。このモデルは、極力子どもと関わらない教師像といえる。最後の「とにかく優しい」「逸脱タイプ」は、「例外モデル」（10.9%）と名付けた。教師はただ優しい接し方だけではなく、生徒の非行等の逸脱行動に対して制止したり、予防するために指導をおこなうことが求められる。その点から非行行為を指導できない、または賛同するような傾向を有しているのがこのモデルの特徴といえる。この4つのモデルを「理想の教師4類型」として分析する。

ここで前記の「教師関係3類型」と理想の教師像を示す「理想の教師4類型」をクロス集計することで現実と理想の違いについてみてみたい。その結果が図12である。

この図から、「受容関係」にある少年は、64.0%が「教示モデル」を理想としてあげていることがわかる。また非行少年に対する教師のかかわりとして、「拒絶関係」の少年に注目する必要がある。教師との関係を絶っているまたは避けている少年も教師の理想像としては、「教示モデル」（41.2%）や「魅力モデル」（35.6%）をあげている。また、「拒絶関係」の教師に近い「不干渉モデル」（10.8%）は約1割であることから、実際に多くの「拒絶関係」にある

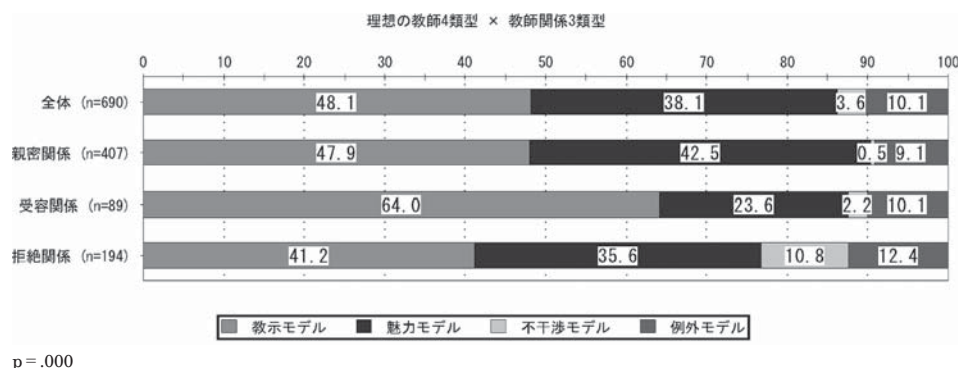


図 12 現実の教師関係と理想の教師像

少年が、教師との関わりを求めていることが示される結果となった。

#### 4) 学校生活に対する無関心な傾向とその影響

最後に、ロジスティック回帰分析を用いて非行少年の学校生活以外に楽しみを見出す傾向、言い換えれば学校生活に対する無関心な傾向をみてみたい。表 5 は、「学校生活以外に楽しみあり」を従属変数とし、独立変数として性別（ダミー変数）、年齢を設定した。さらに友人関係（安心できる友人なし、承認、不安感）、学校生活（孤独感、学業のあきらめ、もめごと）、教師関係（えこひいき、承認、実際の関係）を独立変数として設定し、ロジスティック回帰分析をおこなった<sup>(10)</sup>。

表 5 学校生活以外の充実感の規定要因（ロジスティック回帰分析）

	B	S.E.	Exp (B)	多重共線性の診断	
				許容度	VIF
男子ダミー	-0.552	0.399	0.576	0.961	1.041
年齢	0.010	0.070	1.010	0.963	1.039
拒絶関係ダミー	0.818	0.359	2.267*	0.403	2.479
親密関係ダミー	0.455	0.304	1.576	0.407	2.457
安心できる友人なし	-0.226	0.104	0.798*	0.859	1.164
友人からの承認	0.007	0.121	1.007	0.751	1.332
友人関係の不安	-0.343	0.112	0.710**	0.740	1.352
学校生活の孤独感	0.440	0.125	1.552**	0.872	1.147
勉強のあきらめ	0.296	0.091	1.344***	0.940	1.064
もめごとに巻き込まれる	0.115	0.101	1.122	0.945	1.058
先生のえこひいきは許せない	0.028	0.093	1.028	0.874	1.144
先生からの承認	-0.091	0.115	0.913	0.726	1.377
定数	0.950	0.760	2.587		
-2 対数尤度	560.981				
Cox-Snell R <sup>2</sup>	0.07				
Nagelkerke R <sup>2</sup>	0.12				
N	589				

\*p<.05; \*\*p<.01; \*\*\*p<.001

同表から、友人関係として「安心して話せる友人がいない」をみると **Exp (B)** は、**0.798** であり、気の置けない友人のいないことが、学校生活以外に充実感を得ている傾向にマイナスの影響を与えていることがわかる。つまり、気の置けない友人関係の存在は、学校生活に興味をひかせることに影響していることが認められる。この傾向は、「友人関係の不安」においても同様の傾向としてあらわれている。すなわち、友人の存在や安心感は、学校生活に対する無関心傾向において影響していることが読みとれる。

また学校生活において、「孤独感」が高まれば学校生活以外に充実感を得ていると答えるリスクが約 1.5 倍に高まる結果となった。この結果と同様に「勉強へのあきらめ」をみると **Exp (B)** は **1.344** であり、学業に対するあきらめが学校生活以外に充実感を得る傾向に対して正の影響としてあらわれた。最後に教師関係についてしてみると、「拒絶関係」の **Exp (B)** は **2.267** で学校生活以外に充実感を得る傾向に正の影響を与えていることがわかる。やはり、教師との関係に対して不信感や嫌悪感がともなっている場合は、学校生活自体に興味を示さないことがこの結果からみえてくる。もちろん、同表でとりあげた変数は限られたものであるため、この変数以外の要因が影響している可能性は否めない。しかし、非行少年の学校生活と繋がる要因が友人関係や教師関係、そして学業に対する意欲に影響を受けていることはこの分析結果から窺い知ることができる。したがって、学校生活における非行少年の居場所作りや非行抑止としての学校という存在において、学業面や意識面など多角的にサポートしていくことが重要であろう。

#### 4. 総 合 考 察

ここまで学校生活を中心に非行少年の学校観や教師観などの対人意識や関係性について考察してきた。入院前の就学状況をみたところ、高校で中退しているまたは進学していない割合の高いことが明らかとなった。青少年にとって、学校がひとつの社会との接点の場とみれば、その社会から離脱すること自体が非行要因として関連することも指摘できる。また実際の学校生活において、授業妨害や校則違反等の逸脱行動に走る傾向がこの学業意欲の減退と関連していることも指摘した。この学業意欲の減退は、家庭の問題も考慮に入れる必要はあるが、学校生活における孤独感など非行少年の居場所作りが必要であることが見出された。

次に友人関係をみてみたところ、各年齢で「同じ学校の人」または「以前同じ学校の人」が高い割合を占めていた。退学や進学しないことで、アルバイトや就職先の人間関係、盛り場等の人間関係も構築されるが、学校で出会った友人は少年の交友関係において中心となっていた。また友人関係の特徴として異性を含めた親密なグループの付き合いが比較的が多いこと指摘される。この友人関係を性別を中心にみると、男子の約 6 割が年代と交際しているのに対して、女子の過半数が年上と友人関係を築いていることがわかった。また女子は男子にくら

べて、「一人でいると寂しい」や「言動を友だちから認めてほしい」など、孤独感や友人からの承認欲求が高いことが明らかになった。

最後に教師観として教師の関係と理想の教師像に注目して分析を進めたところ、教師との関係については、「親密関係」「受容関係」「拒絶関係」の3つに大別することができた。このなかで「親密関係」(58.8%)が最も高い値を示しており、次に「拒絶関係」(28.7%)が続いている。「親密関係」は、教師との間にあまり壁がなく、フラットに話ができる関係である。しかし、実際の学校現場では教師として少年の非行行為に対する指導も必要であることから、上下関係を意識しながらしっかりと話を聞いてくれる「受容関係」が注目される。この「受容関係」が全体の12.5%と約1割に止まっていること、そして教師との関わりすら期待できない「拒絶関係」が約3割を占めていることは、今後の学校における少年非行の対応として注視すべき結果といえる。実際の生徒指導においても「受容関係」を維持していた少年は、「密接関係」や「拒絶関係」よりも指導を受けた経験が少ないことがデータから読みとれた。

理想の教師像としては、女子は「話を聞いてくれる先生」、男子は「おもしろい先生」が高い割合を占める結果となり、この理想の教師像を4つに分類することができた。4類型の結果として、「教示モデル」は約5割、「魅力モデル」は約4割を占めていた。特に「受容関係」においては、「教示モデル」が64.0%と最も高い割合を示した。非行少年の分析において注視される「拒絶関係」では、理想の教師として「不干渉モデル」は約1割に止まり、8割近くが「教示モデル」や「魅力モデル」をあげていた。つまり実際は教師と距離を置いている状況であるが、理想としては教師とかかわりを持ちたいという意味がこの結果から窺い知れる。この点は、教師が非行少年との関わる際に念頭に置く必要があろう。

最後に学校生活以外に楽しみを見出している、言い換えれば学校生活に対して無関心な傾向とその影響に着目して分析したところ、この学校生活に興味や関心がない傾向は、教師の関係以外にも友人関係や学業に対する諦めなどが多様に影響していることが明らかとなった。

本論では、学校生活における非行少年の意識や人間関係を中心に考察してきた。近年の学校は、教師の働き方改革やブラック部活と評される指導方法、その部活動そのものの見直しなど、いくつもの課題が山積している。また本田(2020)が指摘するように、教育現場では「ハイパー教化」(画一化と序列化が同時に強力に作動する状況)が広まっている。この状況下では、同調圧力が増し、逸脱行動に対する非難は今後増幅されるだろう。非行少年にとって学校は、友人関係を結ぶきっかけを与える場であり、教師との関わりを通じて非行からの脱却や立ち直りの契機を得る場でもある。加えて、少年非行に対する支援は、学業的なサポートとともに学校を中心とした地域連携など多様かつ広範に展開されることが期待される。非行少年にとって学校は、学業だけではなく友人関係の構築や教師という大人モデルの形成など、多様な機能を有している。今後、家庭生活等を含めた課題の分析を進め、さらなる検証を進めていきたい。

〔注〕

- (1) 『令和元年度学校基本調査』によれば、それぞれ学校の在校生数をみると、小学校（6,368,550人）、中学校（3,218,137人）、高等学校（3,168,369人）で減少しており、特に小学校と中学校の在学者数は過去最少となっている。また土井（2010）や岡邊（2013）等の研究では、刑法犯等の少年が減少していることを明らかにしている。
- (2) 非行少年に対する中学校と少年院の連携については、作田（2019）を参照のこと。中学校の教員と少年院の法務教官が関わることで、互いの知見を共有し、指導面においても相乗効果をもたらすことを指摘している。
- (3) 施設の性格上、法務教官に関する質問が含まれているため、無記名の後、別途封筒を用意して回答後すぐに封入することで、アンケート内容に対する率直な回答ができるように配慮した。また2018年時点における全国の少年院の数は52施設である。
- (4) この図では、年齢を「14歳・15歳」「16歳・17歳・18歳」「19歳・20歳・21歳」に大別している。本論は、学校生活を中心としていることから、区分を概ね中学校と高校の在学年齢に集約し、その他を「19歳・20歳・21歳」にまとめている。他の図表においても同様の趣旨から区分している。
- (5) ちなみに学校生活において「私はスポーツが得意だと思う」という設問を用意したところ、「そう思う」55.5%、「どちらかといえばそう思う」21.6%、「どちらかといえばそう思わない」14.0%、「そう思わない」8.8%であり、約8割が「思う」と回答している。
- (6) 異性の友人数と親友の有無をクロス集計したところ。以下の通り、親友数と同様の傾向を示した。

	1人	2人	3人	4人	5人	6人～10人	11人～15人	16人～20人	21人以上	合計
思う	4.3(21)	8.1(40)	6.9(34)	3.0(15)	7.3(36)	23.1(114)	6.5(32)	12.8(63)	28.0(138)	100.0(493)
思わない	16.8(17)	12.9(13)	9.9(10)	4.0(4)	8.9(9)	15.8(16)	4.0(4)	6.9(7)	20.8(21)	100.0(101)

（注）カッコ内は実数

- (7) 教師に対する関係については、表1に示したように高校を中退した少年や進学しなかった少年も多く、かつ『令和元年度版犯罪白書』（2019）で示したように非行行為が顕著にあらわれる中学校の時期に注目して中学校の教師との関係を設問として用意した。
- (8) 「その他」の自由記述の内容を類別すると次表の6つのタイプにわけることができる。それぞれのタイプの説明であるが、「フラットタイプ」とは、上下の意識や教師という意識を有していないタイプである。次に「信頼タイプ」は、教師として信頼しており、仲の良い関係を維持しているタイプといえる。「無視タイプ」は、存在そのものを否定するタイプであり、「敵対タイプ」は、教師と対立しており、時には喧嘩の対象としてみるタイプである。「軽視タイプ」は、教師の存在は肯定しているが、教師を見下しているタイプといえる。最後に「不信タイプ」は、少年自身の理想的な教師像とくらべて現実の教師に対して不信感を抱いているタイプといえる。特にこの「不信タイプ」は、非行少年に対する教師の関わりにおいていくつかの問題を提示している。つまり、この「不信タイプ」をどのようにして「信頼タイプ」に移行させていくのかが、少年非行に対する今後の生徒指導の課題といえる。この課題は、教師の非行少年に対する意識の改革を必要とする。そのまま少年との関係を放置すれば「無視タイプ」にシフトすることもあり、関わり方によって「フラットタイプ」から「軽視タイプ」へシフトすることもある。また教師という地位からの力に頼り過ぎれば「敵対タイプ」に転じることになる。いかにして「信頼タイプ」に移行するのか、この課題に対して教師自身の指導方法や周囲の協力を用いて対応する必要がある。



フラットタイプ	信頼タイプ	無視タイプ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友だちみたいな人</li> <li>・ 暇人相手</li> <li>・ 知り合い</li> <li>・ なんならツレの感覚</li> <li>・ 何でもしてくれる</li> <li>・ 気楽に話すけど本音ではない話ばかり</li> <li>・ 上下関係がなかった</li> <li>・ 校長とは友だち、担任は嫌い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 師弟関係</li> <li>・ 1人だけ信頼できる人がある</li> <li>・ 一部の先生とは仲が良かった</li> <li>・ 母親的存在</li> <li>・ 優しい大人</li> <li>・ 部活の顧問として接する</li> <li>・ 第二の親的存在</li> <li>・ 中1～2までは皆仲悪かったえけど少年院出て、ちょっと仲良くなった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ どうでもよい関係</li> <li>・ 覚えていません</li> <li>・ うざい</li> <li>・ 相手にしない</li> <li>・ 無関心</li> <li>・ 話しない、うっとうしい</li> <li>・ 用以外話さない</li> <li>・ 他人</li> <li>・ 話がある時以外は、空気のような存在</li> <li>・ 顔も見たくない</li> </ul>
敵対タイプ	軽視タイプ	不信タイプ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ もめてばかり</li> <li>・ ケンカ・暴力振るう (お互い)</li> <li>・ 会いたくない</li> <li>・ 学校に行ったらケンカしてた</li> <li>・ 喧嘩をよくしていた</li> <li>・ 対立関係</li> <li>・ よくもめていた</li> <li>・ 心底嫌い</li> <li>・ 存在を感じたり、関わりたくない敵</li> <li>・ 好きではない</li> <li>・ 敵対関係</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分より下に見ていた</li> <li>・ いじめていた</li> <li>・ 下っ端、ばしり</li> <li>・ 自分たちの方が立場が上</li> <li>・ 単なるサラリーマン</li> <li>・ クズ</li> <li>・ 先生みんなをばかにしてた、なめてた</li> <li>・ めんどくさいと思ってた (おせっかい)</li> <li>・ 出会うたびに嫌がらせをしていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私を不良と言って近づかない</li> <li>・ いつも怒ってくる</li> <li>・ 体罰ばかりで話したくない</li> <li>・ そもそも学校に行っても帰らされた</li> <li>・ どういう場でも関わりたくない</li> <li>・ 一部の先生以外、一切話したくない</li> <li>・ 先生の方が私を恐れていた</li> <li>・ 避けられる、相手にされない</li> <li>・ 反面教師</li> <li>・ 学校に行けなかった、行ったら警察を呼ばれのけ者扱いだった</li> <li>・ イジメのことを真剣に考えてくれなかった</li> <li>・ ずっと裏切られていた。殴られていたこともあった</li> </ul>

(注) 同一内容の回答は、統合して表記している。

- (9) それぞれのタイプについて説明する。はじめに「理解・受容タイプ」は、共感し理解してくれるタイプである。次に「公平タイプ」は、少年たちを平等で色眼鏡でみないタイプである。「正対タイプ」は、少年と向き合うことを重視したタイプである。次に「指導タイプ」であるが、この教師のタイプは、一般的な教師モデルを遂行するタイプといえる。「本気タイプ」は、例示のようにドラマで演じられているような全力で子どもに関わり、守ってくれるタイプといえる。「気さくタイプ」は、教師という仮面を脱いで一人の人間としてかわるタイプである。「メリハリタイプ」は、常に優しいだけでなく、指導するときにはしっかり指導するタイプである。「無関心タイプ」は、教師の存在を否定するまたは関わることを避けるタイプである。最後に「逸脱タイプ」は、教師という立場や価値観から逸脱するタイプである。このタイプは、「本気タイプ」と一見重なる点も多いが、「本気タイプ」は子どもの成長のために逸脱する点で大きく異なる。

非行少年の教師観と学校生活に関する実証的考察（作田誠一郎）

理解・受容タイプ	公平タイプ	正対タイプ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のことをわかってくれる先生</li> <li>・生徒の事を思って接する先生</li> <li>・信じてくれる先生</li> <li>・優しく、俺だけの話を聞いてくれる女の先生</li> <li>・綺麗ごとだけで片付けない人</li> <li>・共感してくれる先生</li> <li>・生徒を尊重する先生</li> <li>・一人一人の個性をわかってくれる先生</li> <li>・自分のことを真剣に考えてくれる人</li> <li>・自分のことをよく理解してくれる先生</li> <li>・全てを受け入れてくれる先生</li> <li>・どんな生徒でも受け入れてくれる先生</li> <li>・親身になってくれる人</li> <li>・味方でいてくれる先生</li> <li>・個別で話を聞いてくれる先生</li> <li>・最後まで責任持って面倒を見てくれる先生</li> <li>・相手の気持ちを心からくみ取れる先生</li> <li>・母親のような存在</li> <li>・寄り添ってくれる先生</li> <li>・心がこもってる先生</li> <li>・心のある人</li> <li>・人のことを考えられる先生</li> <li>・したくない事を無理やりさせず、休んだり遅刻したりエスケープしても怒るんじゃないくてええ距離で接する先生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決めつけず、話を聞いてくれる先生</li> <li>・対等人</li> <li>・悪い子どもでも向き合ってくれる先生</li> <li>・同じ目線でいてくれる先生</li> <li>・平等な人</li> <li>・筋が通った先生</li> <li>・みんな平等に対応する先生</li> <li>・自分と同じ目線で考えてくれる先生</li> <li>・生徒を冷たい目で見ない先生</li> <li>・悪、真面目関係なく全力な人</li> <li>・えこひいきが無くして気を使ってくれる先生</li> <li>・正しい対応ができる先生</li> <li>・常識にしばられず、生徒の心をつかみきる先生</li> <li>・一人一人に関われる先生</li> <li>・厳しさの中に優しさがあり、一人一人の生徒と対等な関係として向き合う先生</li> <li>・先生でも固定概念にとらわれず、学校としてじゃなくて、一人として話をしてくれる先生</li> <li>・同情じゃなくて共感してくれる人。私を一人の人間として見てくれる人</li> <li>・生徒の尊敬できることを探して対等に関わってくれる先生</li> <li>・良い悪いとか関係なしに付きあって話しとかしてくれる人</li> <li>・その人の言葉や行動じゃなくその人自身を見てくれる先生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・向き合ってくれる先生</li> <li>・まっすぐ自分のやり方で生徒と向き合う人</li> <li>・勉強のできない子に対して付き合う先生</li> <li>・個々と向き合ってくれる先生</li> <li>・正面からぶつかってくる先生</li> <li>・嘘をつかず私と向き合ってくれる先生</li> </ul>
		指導タイプ
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の仕方が上手い先生</li> <li>・物知りの先生</li> <li>・知識が豊富な人</li> <li>・礼儀などしっかり教える先生</li> <li>・勉強を教えてくれる先生</li> <li>・人として大切なことを教えてくれる先生</li> <li>・現実を教えてくれる先生</li> </ul>
		本気タイプ
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・熱血教師</li> <li>・情に熱い</li> <li>・何事にも熱い先生</li> <li>・金八先生</li> <li>・GTO みたいな先生</li> <li>・生徒のために首をかけられる先生</li> <li>・嫌われる覚悟を持って子どもに接する先生</li> <li>・組織にのまれない先生</li> <li>・常に全力</li> <li>・他の先生から何言われようがいざという時に味方になってくれる先生</li> </ul>
気さくタイプ	無関心タイプ	逸脱タイプ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・誰に対しても素の人</li> <li>・仕事として接するのじゃなく人として接する人</li> <li>・裏が無い先生</li> <li>・プライベートがわかる先生</li> <li>・一緒に楽しめたり色々話しができる人</li> <li>・距離を作らない先生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何も言ってこない先生</li> <li>・理想はありません</li> <li>・何もしない人</li> <li>・何も言わんでかまわんでほしい。うざいだけ。</li> <li>・関わってない</li> <li>・別にいない</li> <li>・イメージがわからない</li> <li>・学校行っていないからわからん</li> <li>・何も話しかけてこない先生</li> <li>・あまり干渉してこない先生</li> <li>・普通の先生</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タバコくれる先生</li> <li>・空気が読めてふざける先生</li> <li>・悪い事をしても怒らない先生</li> <li>・刺青をばちばちに入れている先生</li> <li>・そこそこできてたらいいと思ってくれる先生</li> <li>・生徒の言うとおりにする先生</li> <li>・やりたいことをさせてくれる先生</li> <li>・何でも買ってくれる先生</li> <li>・仕事だけをしてもそれ以外は何かしない先生</li> <li>・下っ端、ばしり</li> </ul>
メリハリタイプ		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・けじめのある先生</li> <li>・叱ってくれるけど楽しい先生</li> <li>・親身になってくれて厳しいけど優しい先生</li> <li>・筋の通った人、芯のある人</li> <li>・ただ優しいだけでなく、子供のために時にはしかってくれる先生</li> <li>・メリハリのある先生（やる時はやるし、遊ぶ時は遊ぶ）</li> </ul>		

（注）同一内容の回答は、統合して表記している。

- (10) 使用する変数は次の通りである。また「学校生活の無関心傾向」は、「学校にいるときよりも、学校以外での生活の方が楽しかった」という設問に従属変数として用いている。

男子ダミー	女子 = 0, 男子 = 1
年齢	14 歳 = 14, 15 歳 = 15, 16 歳 = 16...21 歳 = 21
拒絶関係ダミー	親密関係 = 0, 受容関係 = 0, 拒絶関係 = 1
親密関係ダミー	拒絶関係 = 0, 受容関係 = 0, 親密関係 = 1
安心できる友人なし	「何でも安心して話せる友だちがいない」に「そう思う」= 4, 「どちらかといえばそう思う」= 3, 「どちらかといえばそう思わない」= 2, 「そう思わない」= 1
友人からの承認	「自分の行動や言葉を友だちから認めてもらいたい」に「そう思う」= 4, 「どちらかといえばそう思う」= 3, 「どちらかといえばそう思わない」= 2, 「そう思わない」= 1
友人関係の不安	「友だちと遊んでいるとき、自分だけが浮いてしまうのではないかと不安になることがある」に「そう思う」= 4, 「どちらかといえばそう思う」= 3, 「どちらかといえばそう思わない」= 2, 「そう思わない」= 1
学校生活の孤独感	「学校生活で孤独（ひとりぼっち）を感じていた」を「そう思う」= 4, 「どちらかといえばそう思う」= 3, 「どちらかといえばそう思わない」= 2, 「そう思わない」= 1
勉強のあきらめ	「学校では、勉強できないとあきらめていた」に「そう思う」= 4, 「どちらかといえばそう思う」= 3, 「どちらかといえばそう思わない」= 2, 「そう思わない」= 1
もめごとに巻き込まれる	「どんなに気を付けてももめごとに巻き込まれてしまう」に「そう思う」= 4, 「どちらかといえばそう思う」= 3, 「どちらかといえばそう思わない」= 2, 「そう思わない」= 1
先生のえこひいきは許せない	「先生がいつも同じ生徒を「えこひいき」（特別なあつかい）することがあった場合は許せない」に「そう思う」= 4, 「どちらかといえばそう思う」= 3, 「どちらかといえばそう思わない」= 2, 「そう思わない」= 1
先生からの承認	「自分の言葉や行動を先生から認めてもらいたい」に「そう思う」= 4, 「どちらかといえばそう思う」= 3, 「どちらかといえばそう思わない」= 2, 「そう思わない」= 1

#### 〔引用文献〕

- 知念渉, 2018, 『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー——ヤンキーの生活世界を描き出す』青弓社.
- 土井隆義, 2010, 『人間失格? ——「罪」を犯した少年と社会をつなぐ』日本図書センター.
- 広田照幸, 2019, 『教育改革のやめ方——考える教師, 頼れる行政のための視点』岩波書店.
- Hirschi, T., 1969, *Causes of Delinquency*, University of California Press. (= 1995, 森田洋司・清水新二監訳『非行の原因—家庭・学校・社会へのつながりを求めて』文化書房博文社.)
- 本田由紀, 2020, 『教育は何を評価してきたのか』岩波書店.
- 法務省, 2019, 『令和元年度版犯罪白書』.
- 松嶋秀明, 2019, 『少年の「問題」/「問題」の少年』新曜社.
- 文部科学省, 2019, 『令和元年度学校基本調査』.
- 内閣府, 2015, 『少年非行に関する世論調査』.
- 岡邊健, 2013, 『現代日本の少年非行——その発生態様と関連要因に関する実証的研究』現代人文社.
- 作田誠一郎, 2019, 「中学校における少年院の連携事業に関する一考察」『社会学部論集』第 69 号, 57-75.

(さくた せいいちろう 現代社会学科)  
2020 年 5 月 11 日受理